

ノーベル賞の選考に不正はないのか？

ノーベル賞とは、アルフレッド・ノーベルがダイナマイトを発明し、スウェーデンの硬い地下の岩盤の掘削に役立ったが、その後、当然ながら武器としての爆弾や砲弾に使用されるようになり、巨万の富を得た。1890年代、まだ生存中に兄が亡くなり、間違われて「死の商人が死んだ」と報道された。これに愕然とし、自分では世の中の役に立っていると考えていたらしい。これを気に病み、遺産の大部分を基金に、物理学、化学、経済学、文学、平和賞、医学・生理学賞を創設し、莫大な賞金とともに人類に貢献した人々を表彰するようになった。決定権はスウェーデン王立アカデミーであり、その最大の目的は、「白人の優秀性を誇示するためのもの」であった。

日本人の最初のノーベル賞は、ノーベル賞ができてから 50 年以上経過した 1949 年湯川秀樹博士の理論物理学（中間子理論）であった。2 人目は 1965 年の朝永振一郎である。ノーベル賞は 1896 年レントゲン博士の発見に対しての受賞から始まるが、このとき北里柴三郎のジフテリアの血清療法が対象になっているのだが、日本人（東洋人）にはくれない。北里の同僚兼後輩のベーリング博士に与えられた。

1920 年の山際勝三郎の「がん刺激説」はきわめて有力だったのだが、白人の寄生虫説にあたえられた。このときの山際の受賞に関して、「日本人にはまだ早いだらう」という根拠のない理由で受賞できなかった。のちになって、この白人のがんの定義が間違っていて、つまり、がんではなかったことが判明する。山際の業績は、市川厚一が毎日々々ウサギの耳にコールタールを擦り込んで、煙突掃除人に多かったがんを再現・実証したものであり、学術的にも有意義なものであった。

1910 年には、鈴木梅太郎がオリザニンを発見している。現在のビタミン B1 である。数年のちにカジミール・フンクがビタミンとして報告した。米ぬかに脚気をなおす成分があるとして、オランダの C・エイクマンが受賞している。……この日露戦争の頃は、日本でも脚気の原因を感染症として強力に推進していたのが、陸軍軍医森鷗外で、まあ、恥をかいた。

もっと以前、1900 年には、高峰讓吉が副腎髓質からアドレナリンを抽出し、結晶化に成功している。これを米国のジョン・エーベルが、高峰が俺の仕事を盗んだ、とあらぬ疑いをかけ、ぬけぬけと「1900 年秋に自

分の研究所を高峰が訪ねてきた」と書いている。この野郎は知らないだろうが、高峰は 1900 年 7 月 21 日に結晶化に成功している。しかもエピネフリンという名前までつけて、米国では今もってエピネフリンと呼ぶ。ヨーロッパでは、さすがにアドレナリンと称している。・・・現在、スズメバチなどに刺されることによるアナフィラキシーショックのために、エピペンと称するものを携帯するようになっているが、これは当然アドペンと呼ぶべきものである。さらに、この男は羊の副腎から抽出したといていたが、のちに嘘とわかっている。

野口英世の脳梅毒の解明も無視された。

武井武は、「フェライトの父」と呼ばれているが、昭和 5 年（1930 年）これを開発し、オランダのフィリップ社から送って欲しいと依頼され、親切に送ったところ、この会社は、これを分解しその製法を剽窃し、特許を申請した。オランダ人は、性悪の上に泥棒でもある。江戸時代の芸人がヨーロッパを巡回したが、オランダだけ、口をきわめて罵っている。日本刀を抜いて喧嘩もしたという。現在では、フェライトはステルス機にも不可欠であり、武井は、(株)TDKを創設し、ビデオからステルスまで幅広い貢献をしている。フランス人ルイ・ネールがフィリップス社から与えられた理論を盗み、自分の名前で論文を書き、ノーベル賞を受賞している。

八木秀次と西澤潤一の業績には、特許庁の間抜けた話が残されている。

八木秀次の場合、1925 年指向性アンテナを発明したものである。これによって 300 km 離れた敵航空機や艦船の位置を知ることができる。1942 年不落と言われたシンガポールを日本軍が 3 か月で陥落させたとき、ここで電探 2 基を鹵獲した。その操作方法を記した半焼けのメモを焼却場で発見した。

この分野では遅れていた日本軍は、急ぎメモの解読を始めるが、YAGI Array がわからない。ヤギと読むのかヤジなのかわからない。品川の收容所にいたニューマン伍長がメモの持ち主とわかり、さっそく召喚する。「それは、その装置の発明者の名前だが・・・」それでもよくわからないので、さらに詳しく聞きただす。伍長はからかわれているものと誤解し、機嫌が悪くなる。「本当に知らないのか？」と半信半疑で問い返す。「貴国の学者の名前だ。」慌てて特許庁に聞くと、「あれは碌でもないのだから削除した。」という返事。みな頭がくらくらした。・・・軍も悪い。無線

を発すると、こちらの居場所がわかってしまう、とも考えていた。

西澤潤一の場合はもっとひどい。光ファイバーの特許を 1964 年に申請したところ、特許庁の役人は「意味がわからない。(つまり理解できない。)」と門前払いをくらわせた。米国籍の中国人チャールズ・カオは苦笑する西澤教授を慰めた足で米国に渡り、西澤の理論をそっくりいただいた上で論文にし、米国コーニング社が特許をとり、共犯のカオはノーベル賞を取った。

のちの話である。日立・東芝の社員が特許庁審判官 10 人を供応していたことがバレた。・・・ 審判官は、赤坂を飲み歩き、タクシーでご帰還を繰り返し、総額で 300 万円もたかっていた。・・・それぞれ懲戒免、贈賄で逮捕された。・・・馬鹿な特許庁の役人に何が大事かを教えるためだったという悲痛な企業の叫びは伝わらなかった。

米国は、占領軍としてやって来たのであるが、日本人の発明発見したものを強引に接收していった（盗んでいった）。

小麦の農林 10 号は稲塚権次郎の発見である。この苗は、「緑の革命」と呼ばれた。これを品種改良して、東北地方でも多収穫の小麦を量産していた。腰の強い「日本人のような品種」である。これを持ち去り、ポーローグがメキシコ産の種類と交配し、インドやパキスタンに提供し 4 倍の収穫量を得る。これで飢餓を救い、平和賞をもらっているが、稲塚の話はしなかった。

中村菌は、火傷や創傷に強い治癒効果があり、兵士の背嚢に必ず入っていた。なんでも盗む米兵（亡くなった日本兵から戦利品を奪っていくのである。）が失敬してその効果に驚いて、酒屋がつくった菌や元の麴まで根こそぎ接收してしまった。

胃液は酸が強く、生物がいるとは考えられなかったのであるが、菌を発見したという報告はいくつかある。しかし、ピロリ菌が胃潰瘍の原因であると最初に発見したのは、小林六造と葛西克哉である。1919 年のことで、彼らは、酸の強い猫の胃から採取した菌をウサギの胃に接種し、胃潰瘍ができることを発見し、さらに、この菌の除菌・殺菌で症状が改善することも発見した。1983 年、オーストラリアのロビン・ウォレンとバリー・マーシャルが菌の再発見と培養法を確立し胃潰瘍・胃がんの原因である、ということで 2005 年のノーベル賞を受賞したが、小林の業

績についてはひとつも話さなかった。

高柳健次郎は、1926年ブラウン管による電送・受像を世界で初めて成功した。

のちの阪大教授吉川秀男は、DNAの構造もわからなかった時代に、一遺伝子一酵素説を提唱したが、戦時中論文を積んだ船が撃沈され、ノーベル賞を逸した。1~2年のちに同じ結論に達した人がノーベル賞を受賞している。

日本人は、猿真似・物まねばかりで、基礎的な研究を疎かにしている、と零戦の堀越二郎さんを否定した馬鹿な学者がいるが、まったく見当違いの指摘である。

日本人の独創的な業績はいくらでもある。高峰譲吉、鈴木梅太郎、北里柴三郎、長岡半太郎、化学の真島利行、金属の本多光太郎などなど。

2010年ノーベル化学賞は、根岸英一、鈴木章。クロスカップリングは、米国人には難しすぎたため、盗まれずに済んだから。

このところ、日本人のノーベル賞が続いているが、当然といえば当然のことで、それまでは日本人だからといって受賞できず、受賞に値する業績は米国人はじめ白人どもが盗んできた。どの分野においても日本人の頭脳、アイデア、技術、いずれをとっても欠かすことができなくなっているのである。そういう仕事が増えている、白人が盗もうにも盗んでいる暇がなくなってきたのである。

この稿は、ほとんど高山正之氏の「変見自在」からの引用である。この人の読書量についてはただ驚くのみである。「外科の夜明け」まで読んでおられたのには驚いた。この本は、われわれが卒業した頃にほぼ全員が読んだものである。それでいて、テレビも見る。新聞は大事なタネだから朝日新聞も読む。雑誌も読む。知識が豊富になるのは当然だが、その読みも深い。・・・・・20冊以上のどの著書でもいいから、ぜひ一度読んでおかれたほうがいい。

20016.06.25.